白い椿

紫 李鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おっかちゃんは、どこにいるの？

目　次

白い椿

雪の降る晩でした。囲炉裏(いろり)の火がパチパチと音を立てています。
じっちゃんの作ったごはんを食べながら、小雪が聞きました。
「おっかちゃんは、どこにいるの？」
「うむ……ふたつ山を越えたところじゃ」
「……いつ、かえってくるの？」
「うむ……雪が解けたらなぁ」
「いつ、ゆきはとけるの？」
「うむ……暖かくなったらなぁ」
「ふぅーん。……はやくあったかくならないかなぁ」
そう言いながら、小雪は里芋(さといも)をほおばりました。
「……もうすぐ、なるよぉ」
そう言って、じっちゃんも味噌汁(みそしる)をすすりました。

……いつになったら、あったかくなるの？　ずーっと、ずーっとさきだ。だって、まだ、ゆきがふってるもん。……おっかちゃんにあいたいなぁ。――

小雪は、じっちゃんが眠りについたころ、家をそっと抜け出しました。顔も知らないおっかちゃんに会いたかったのです。ふたつ山を越えたら、おっかちゃんに会える。

ギュッギュッ
積もった雪を踏む、小雪の足音しか聞こえません。
……おっかちゃん。
心の中でそう呼びながら、おぼつかない足取りで山道を登りました。滑っては登り、滑っては登り。
「ハァハァ……」

いつまで経っても、前に進めません。小雪は疲れ果てて、その場に倒れてしまいました。
……おっかちゃん。

どのぐらい、そのままでいたでしょうか……。
「こゆきや」
女の人の声がしました。小雪は夢を見ているのだと思い、目を開けませんでした。すると、
「こゆきや、さあ、おうちに帰りましょう」
と聞こえました。ゆっくりと目を開けると、そこには、白い着物を着た、長い髪の女がほほえんでいました。
「……おっかちゃん?」
小雪は目を丸くしました。
「さあ、おいで」
女が両手を広げました。小雪は急いで立ち上がると、女に駆け寄りました。
「おっかちゃん!」
小雪は嬉しそうに女に抱きつきました。女の顔をしげしげと見つめ、そして、その顔に触れました。
「あったかいほっぺ。……おっかちゃん」
小雪は女のやわらかい乳房を掴むと、安心したように眠ってしまいました。——

「小雪やー」
じっちゃんの声がしました。
「そんなとこで寝たら、風邪ひくぞ。さあ、布団に入って」
「むにゃむにゃ……」
眠たい目をこすると、薄目を開けてみました。囲炉裏の炎が揺れているのが見えました。囲炉裏端で眠っていたようです。
……あれぇ? どうしておうちにいるの? おっかちゃんにだっこされてたのに。あれはゆめだったのかなぁ……。

じっちゃんが、布団に運ぼうと小雪を抱き抱(かか)えたときです。
「あれっ？」
ハッとしました。小雪の着ていたちゃんちゃんこが濡(ぬ)れていたのです。
……はて、いつの間に外に出たのじゃろ。
土間(どま)の隅に揃(そろ)えてあった小雪のわらぐつには、雪がついていました。
どこに行ってたのじゃろ……。
どうして外に出たのか、じっちゃんには思い当たりませんでした。
――そして、春が来ました。庭の白い椿も咲きました。格子窓(こうしまど)から白い椿がのぞいています。そこは丁度(ちょうど)、小雪の寝間(ねま)が見える場所です。朝も昼も晩も、いつもいつも、白い椿が小雪の寝間をのぞいています。
じっちゃんはまだ、小雪に本当のことを言っていません。もう少し大きくなってから話すつもりでいます。……おっかちゃんのことを。
――
おわり